平成２４年４月１日

〒668-0214　兵庫県豊岡市出石町内町５９　勝林寺

勝林寺寺報

病中回想

二月に入ってその初旬。先ず腰が痛んで自転車に乗れなくなり、やがて今度は両方の手の先が痺れて痛んで、茶碗・お箸が持てない程。一月末の手術麻酔の後遺症を疑って調べたがそうではない。リュウマチ科で二日病院へ通って診てもらったが各種検査も全く異常なし。それでも痛みは取れない。「精神的なストレスかも」と薬はもらつた日から風邪も重なり本格的に病状悪化。寝込んでしまった。寝込んで二日目からこの機会にと考えて改めて鴨長明の「方丈記」をもう一度読むことにした。

冒頭部分は死んだ母から聞いてうろ覚えに暗唱できる。東日本大震災一周年でもあり、丁度親鸞さまの時代とも重なるし、両者は大災害のなかどう生きそして死んだのか。その結末のところを考え比べてみたかったのである。

とある文庫本で東大の国文学の先生の詳しい注釈に従って読んでみた。

長明が京都の下賀茂神社正根宜の次男として生まれたのは久寿二年（一一五五）であるから親鸞が関東から都へ返ったころには長明は七〇歳なかば。祖母の家を継いでいたが出家して、たまたま親鸞の生地、所もおなじ伏見日野の里に方丈を結び遁世生活に入っている。さて、その出家遁世の動機は

一、按元の大火（一一七）市内大半焼失。
二、治承の竜巻（一一八〇）市中大破壊。
三、同じ年の福原遷都。官庁官邸豪邸全部大移動（一年立たずして還都）
四、養和（一一八一～一一八二）全国大飢饉。餓死者野に満つ。
五、元暦の大地震（一一八五）
六、寛元の大震災（一二四三）
七、京都市内大火災。親鸞も被災。

当時の防災施設とてなにもなく、家屋施設はもちろん生命の被害は今日の比ではなかった。政治はテレビ「平家物語」等でご覧のとおり中央王室貴族は政権争い。地方の豪族武門は領地獲得戦争。源平合戦。京都へは難民流入。治安の混乱、盗み盗賊横行等など「濁世末法」そのものであった。

長明はそのなかを生きてきた。人の生の死の空しさを知った。そのなかでせめて自己の生と死とを確立したかった。彼は「三界唯心」の『惟摩経』などにすがり、世間欲から離れてひとり心清く生きようとした。それで人や世間との交渉を絶ち一人清浄に生きるため日野の里の方丈にこもった。

しかし、結果、そう取り澄まして生きることが真に私欲煩悩を離れた清浄なものになったのか。独りよがりにとりすました偽装擬態に過ぎぬではないのか。又、人を見下げて孤高を装う下劣極まりない擬態ではないか。

「これはまた妄心のいたりて狂わせるか。其のとき心更に答えるなし。ただ傍らに舌根を借りて「不請の阿弥陀仏」両三辺申して止みぬ。

ところで、この東大の先生は、この「不請」がつかめない。「不請不精」「不承不承」。「エイ仕方ないナンマンダブツでもとなえるか」といったやけくそ念仏にしてしまった。失礼だがこれは法然・親鸞の浄土の教えに説かれている。「人間が願い祈らなくても如来さまが先がけておまえをたすけさせておくれと呼んで下さるその如来様のはたらきに素直に帰命して素直にお答えするその念仏です。そうする念仏者を、「プンダリカ（白い蓮の華の様な人、妙好人などとお経さまには褒めて下さるお念仏なのです。

すなわち「往生は他力」ということを納得して下さっているのでした。

「浄土往生」とは、「浄土」へ「往き生まれる」ことてす。「浄土」は「穢土」の対。「穢土」とは「人間欲・煩悩欲に染みきった世界」のこと。「どこまでも自己中心的な、わたしたちのこの世のこと」。

人と対比して喜び悲しみ。人と比べて誇り差別し。勝ち負けを競い。正邪・美醜・長短優劣・貧富・多少を比較競争し、いのちをかけてくらしているのがこの私たちの生きているせかいではありませんか。

さてひるがえって、私たちの職場。

「しつこくののしれ　人の失敗。
笑ってごまかせ　自分の失敗」。これが原則と云った人がいます。

互いがごまかしあい、ひとを見下げ差別しあうそんな職場であるのは悲しいこととは思いませんか。殊に障害をもつものの集団てす。

程度の差こそあれだれも同じ弱さ悲しさもろさ欠点を抱えて生きている仲間ではありませんか。「遠く通ずるに世界のうちみな兄弟」だれもが如来さまから願われているきょうだいというのが親鸞さまのこころでした。

「だれも同じ仲間！きょうだい！」

この点が抜けたらもうおしまいです。私自身、そんな人々を唾棄しながらおのれの孤高を保ち誇ろうとしているいゃらしいヘビ・サソリのように生きている人間ではないのか。

父が死んで、それから、なか三年、母は男女四人の子育て、姑づかえ、ご門徒づとめなど一身に背負っての奮闘でした。八十年前の「主婦」は現代からでは想像もできないほどの重荷を背負っておりました。そのなかでわたしはその母によって厳しく育てられました。

年中朝五時起床。母子二人で本堂へ。新制「正信偈ご和讃」を練習。次に高い「高座」というもののうえに座らされて、子供にとっては意味も何もわからん「お説教」なるものを唱えさせられます。今では殆ど忘れましたが、これは母が好きで、わが子の唱えるものを聞きながらサメザメ泣くこともありました。

その一

「人が悪ない　我が身が悪い
破れ車の　輪（我）がわるい」

その二

「聞いても聞いてもなんともない
なんともないのがオラじゃゆえ
オラがあるゆえ親がある
落としはせんぞ！」

そのあと起こされてきた姉妹もいっしょで堂内の板張りを糠袋（ぬかぶくろ）で磨き掃除をみんなでするのでした。

この期間は僅かでしたが、わたしは老齢になるに従ってこのことを有り難く鮮明に思い出されてまいります。それと重なって親鸞さまのご和讃。ご和讃をつくられたときの親鸞様の胸中を思い見たり致します。（つづく）

四月　勝林寺　予定

一日（日）　宮嶋重和宅　忌明法要
一日（日）　組会
二日（月）　金久英明宅　忌明・七回忌
五日（木）　仏教会役員会
六日（金）　成田俊明宅　三回忌
七日（土）　光顕寺永代経
八日（日）　木村和則宅　一七回忌
一四日（土）　観桜会
一五日（日）　石田達男宅　一三回忌
一五日（日）　出石組総代会　役員会
二一日（土）　数森美咲子宅　忌明
二二日（日）　本覚寺　継職法要
二二日（日）　光顕寺役員会
二六日（木）　みのりを聞く会
二九日（日）　中嶋正枝宅　一三回忌
二九日（日）　数森浩昭宅　三回忌
三〇日（月）　出石組総代会　総会

（敬称略）

TEL0796-52-3083　テレホン法話 0796-52-5800

歌の始まり

日本での歌の始めは『万葉集』。約４５００首。しかしその多くは天皇賛美のものが多い。柿本人麻呂という宮廷歌人が編集したのであるからそれは当然かもしれない。しかも時代が皇族氏族権力争いの真っ只中。いつ何時抹殺されてしまうかしれない危機的状況のなか「ごますり」しなければ生きていけない状況。そのなかに庶民の素朴な人間味はどこにとわたしなりに探して見た。

先ずは『相聞歌』恋の歌である。

年代的に最も古いとされる仁徳天皇の皇后（いわひめのおおきみ）

◇君が行き日（け）ながくなりぬ　山たずね
迎えか行かん　待ちにかまたん

◇かくばかり恋つつあらずば高山の巌根し枕（まき）て　死なましものを
恋に生き死ぬ切迫感が心に響く。また

◇秋の田の穂の上（へ）に霧（きり）そう朝霞みいずへの方へわが恋いやまん

少し長いが当の柿本人麻呂が任地石見（いわみ）（いまの島根県）の国から妻と別れて都へ帰る時のうたも

◇石見の海　角（つ）の浦廻（うらみ）を浦なしと人こそ見らめ潟（かた）なしと人こそ云はめ
よしえやし浦はなくともよしえやし潟はなくとも　鯨（いさな）とり海辺をさして　和多津（にぎたづ）の荒り磯（ありそ）のうえに　か青なる玉藻・沖つ藻　朝はふる風こそ寄せめ　夕はふる浪こそ来寄せ　浪の共（むた）か寄りかく寄り　玉もなす寄り寝し妹を　露霜の置きてし来れば
この道の八十隈（やそくま）ごとに万（よろず）たび返り見すれど　いや（だんだん）遠に里は放（さか）ぬいや高に山も越えきぬ　夏草の思いし萎へて　偲ぶらむ妹が門（かど）みむ　靡けこの山。

反歌二首

石見のや高角山（たかつの山）の木の間より
わが振る袖を妹見つらんか

笹の葉はみ山もさやにさや（騒ぎ）けども　われは妹思う別れきぬれば

老齢勝つ官界からすでに疎まれ具合な彼の恋妻との別れ

春を喜ぶ歌

いわばしる垂水（滝）の上の早蕨（さわらび）の萌え出づる春になりにけるかも（志貴王子）

山の上の憶良　宴（うたげ）をまかるときの歌

憶良らは今はまからむ子泣くらむそのかの母も我（わ）を待つらむぞ

旋頭歌（せどうか）

これこそ民衆の歌、民謡。大勢声をそろえてうたった５７７５７７と同じ語を繰り返しはやしうたう歌。方言が交じる。万葉第七巻からいくつか

◇君がため　手力（タヂカラ）疲れ　織りたる衣（キヌ）ぞ　春さらば（春になったなら、）いかにかいかに　摺りてばよけん。

織り娘たちが声をそろえて歌ったのであろう。いとし貴方のために力の限り思いを尽くして織り上げたこの織物。春になったらどんな色にどんな模様に「摺り染め」してあげようかしら。いい人がいるいないにかかわらず合唱したのでしょう。

◇春日すら　田に立ち疲（つか）る　君はかなしも　若草の妻なき君し　田に立ち疲れる

田植えまえ、ボロボロになった案山子。これに向かって囃し立てる若い娘たち。ネエネエそこのおあ兄さん。こんなにいい春の日にションボリ立ってなにしてるの。お可愛そうに。ほれこんなにピチピチの娘さんがここにいるのにサー。若草のようなむすめヨ。（大笑い）

◇水門（みなと）の　葦（アシ）の末葉（ウレハ）を　誰か手折るりし　わが脊子（セコ）が振る手を見んと　我ぞ手折りし

河口近くのおんな集団の間に歌われた民謡。昔、船着き場付近には遊び女の集団がいた。客のないいらだちの彼女たちが自らの慰めに歌った民謡風なもの。

葬儀

平成二四年三月六日

正法寺　数森　弘道様　七二歳

君が代

元歌は『古今和歌集』詠み人しらず「わがきみは…」とあって天皇だけではなく一般にひとのいのちを祝（ことほいだ）歌。明治一〇年代になってなかなか民間に天皇が認識されないのにいらだって東京遷都の際、歌詞を「君が代」と改作し薩摩琵琶「蓬莱山」の曲を参考にイギリス軍学隊長に依頼してつくったものという」。和洋折衷で曲にもギコチないところのあるのはそんなわけ。いご明治末年ごろまでには学校でもまちまちのものが歌われていたと云う。「さざれ石」が「巌イワオ」になるなど非科学的だし教育に反することと反発もある。

蛍の光り窓の雪

明治のはじめに発表の『小学唱歌集』には「蛍」と題してある。曲はスコットランド民謡をそのまま借りた。外国で進水式などで使われていた。

日本では昔から「蛍雪の功」など『沙石集』などに成語にして流行しているが。中国には成語としてはそのような使われ方はない。「照蛍映窓雪案」などが一般的。

車胤と云う子は風采のあがらぬこ子供だったが、太守さまに見込まれ嘱望された。家貧困。夏は練り絹の袋に蛍をつめこみ　冬は雪の明かりで読書。長じて学者徳者の誉れたかく……。

歌詞に日本古来の技法（縁語・懸詞。罹り結びなど）が多様されているため現代のこどもにはなんのことやら皆目解されない面がある。

すぎのとを（年が過ぎる→杉の扉）
あけてぞ（戸を開いて→年明けて）
かたみに（〈互いに〉の古語）
こころのはし（心の一端）
ひとことに（「人毎に」と「おげんきだねの一言に」を掛けた表現）
さきく（さきくあれかしの万葉表現。おしあわせでネ）

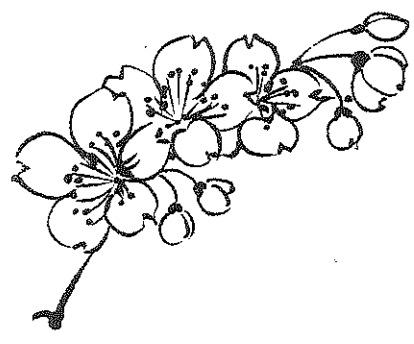
三節・四節には別れの歌に不似合いな領土拡大意欲高揚の軍国主義が見え見え。

募集

観桜会

今年は、いつも以上に長く寒い冬でした。それだけに、春の訪れの喜びはひとしおです。この喜びをみんなで軽いスポーツをしながら、ごちそうをいただきながら、分かち合いましょう。ぜひ、ご参加ください。

日時　平成二四年四月一四日（土）
　午後二時より
場所　勝林寺本堂
内容　第一部　囲碁ボール
　第二部　お花見
その他　第二部のみ会費が必要です。
（男性一五〇〇円、女性一三〇〇円）
地区の仏婦の評議員さんを通じてお申し込みください。



たくさんのご参加をお持ちしています

仏壮・仏婦役員一同

出石組念仏奉仕団

日時　平成二四年五月一七日から一八日
参加費　一人二〇、〇〇〇円
参加申し込み　四月一〇日までに寺までお知らせください。